

〈卒業生短信〉

made in じゃば科

伊 勢 田 七 津 美

今から約 10 年前、私が日本課程を志望したのは、日本語教師になりたいと思っていたからです。小学校～高校で出会った ALT の先生方の存在が、私にとって非常に印象的で、私もそんな存在になれたら…と思ったのです。

日本課程在学中は日本語教育関係の講義に出席し、日本語教育能力検定も受験しました。web サイトや書籍からも情報収集に努めていました。

そうして日本語教育のことを学んでいくうち、JSL 児童・生徒の中には、普段の会話や読み書きでは問題がないように見えてしまうため、日本語の力が不足していることを見過ぎされ、学力が足りないわけではないのに「頭が悪い」「勉強ができない」というレッテルを貼られているという現状を知りました。

それまでは海外の学習者のことばかりに目を向けていたのだと思います。すぐ近くにも日本語さえ理解できればもっと違う人生が待っている子どもたちがいるのでは、と思い始めました。

その当時、ちょうど就職活動中だった私は、いくつか参加していたうちの一つの企業の説明会で、「まさに私が考えていたこと！」と大いに感銘を受けました。学習塾のフランチヤイズ展開を主に行っている会社で、現在は全国に約 1 万 6 千の教室があり、乳幼児から大人まで幅広い年齢の生徒さんが通ってくださっています。

学習塾の会社で働いていると言うと必ずと言っていいほど「先生ですか」と尋ねられますが、残念ながら私は先生ではありません。都内の事務局で、管轄する約 200 の教室の運営や指導のサポートをする仕事をしています。

具体的には、お教室の生徒募集のお手伝いとしてのチラシやポスターなどの業者さんとのやり取りや、先生方の勉強会の準備、生徒さんのためのイベントの企画運営などです。新しい教室ができるときには、小学校の前で先生と一緒にチラシを配ったり、教室に採点などのお手伝いに行ったりもします。

また、フリーコールで教室の保護者の方や外部の方から直接ご質問やご意見をいただくこともあれば、確定申告の時期には先生方の申告書作成のお手伝いもします。

そんな仕事の何が「まさに私が考えていたこと！」だったのか…。

それは教室においての学習が学年にとらわれないものである点です。そして、そのことによりどの子も自分の可能性を伸ばしていけるということが私の問題意識と合致したのです。

実際に教室に通っている生徒には小学 6 年生で小学 1 年生レベルの問題をやっている子

がいれば、小学3年生で高校生レベルの問題を解いている子もいます。学校の授業がわからなくなっている生徒も、その子がわかるころから進めていけばいずれ高い学力を身に付けることができると考えているのです。

弊社の創始者の言葉に『足を靴にあわせる教育か、靴を足にあわせる教育か』というものがあります。学校でいうところの学年が靴で、個人の能力が足です。日本の学校教育においては、語弊があるかもしれませんが、その靴がぶかぶかでうまく走れない子どもは『落ちこぼれ』と呼ばれ、成長の速い子どもは窮屈な靴の中で足を縮こまらせています。就職活動中だった当時から（もしかするとそれ以前から）そのように感じていたので、どの子にもちょうどどの靴を用意してあげることができれば、誰でも早く走ることができるのに！と今も思っています。

企業説明会でこういった理念に触れた私は「これこそ自分が考えていたことだった！ちょうどどの靴が必要なのは日本語の力が足りない子たちだけではない。すべての子どもたちにちょうどどの靴を履かせてあげたい！」と思ったのです。

今もその思いは変わることなく、先生方のお仕事を支えることがよりたくさん子どもたちにちょうどどの靴を与えてあげる一助になるのだと思って日々の業務に取り組んでいます。

先生方の真摯に子どもたちを思う気持ちと教育に対する情熱、何より教室の子どもたちの真剣で健気で希望に満ち溢れた姿は、この仕事に対するやりがいを感じさせてくれるものです。

日本語教師とは違う道を進んでいますが、日本課程に進んでいなければ今の仕事にも巡り会わなかったかもしれません。まだ入社5年目ですので未知の部分の方が大きく、もちろん大変なこともあります。自分の仕事を好きだと言えることはとても幸運なことだと感じています。

さて、ここからは私の在学中の出来事をご紹介させていただきたいと思います。

私が入学した当時は日本課程日本語専攻という名称だったと思います。

今でも年に2回は部活のOB会に参加させていただいているので、なんとなく入試や学部のシステムについても聞いたことがあります。実際にはよくわかっていません。そう多くはありませんが、お教室の先生から外大志望の生徒さんの受験相談を受けることもあります。その際にはきちんとしたアドバイスができず、申し訳ない思いです。そして、そのような相談を受ける際に日本課程志望の方に出会ったことがないのは本当に残念です。

入試制度といえば、ちょうど私の入学した年の前年の入試から二次試験に世界史が加わりました。高校の地歴の選択は地理にするつもりが、世界史が受験科目であると知り高校1年の終わりに絶望したのを覚えています。

そして、同じ試験を受けた同期には満点の自信があるという方もいる中、私は6割程度

の自己採点でした。それでも合格できたのできっと運が良かったのです。

そうして入学した大学で、愉快的同期と楽しい授業に恵まれたことは、本当にラッキーなことだったと感じています。入学以前は東京の大学への進学は不安ばかりで、大学の方が地元へ移ってほしいとさえ思っていました。しかし、そう思っていたのはほんの一時でした。

ところで、私は徳島県出身です。入学当初は、阿波弁と“エセ関西弁”を臆することなく使っていたのですが、ある出来事をきっかけに考えを改めました。

それは、授業と授業の間の移動中のことでした。講義棟 1 階を体育館側から多磨駅側へ歩いていると、前方から同期の留学生が歩いてきました。「何しよるん？」と声をかけたところ、彼は「え？」という表情を見せました。聞こえなかったのだらうと、先ほどより少し大きな声で再度問いかけました。それでも彼の反応は変わらず、もう一度…と思っていた時に「何してるのって意味だよ」と、隣にいた東京出身の友人が彼にむかって言ったのです。それを聞いた彼は納得した様子で、すぐに返事が返ってきました。つまり留学生の彼は、聞こえていなかったのではなく私の問いかけが理解できなかったのです。

このことは私に大きな衝撃を与えました。「何しよるん」は、大した訛りではないと認識していたためです。さらに言えば、地元では「なんしょん」と言うところを、それではあまりに田舎臭いだらうと考え、少し気取って「何しよるん」と言ったのです。それが通じなかったという事実は私の意識を変えました。意思疎通をするためのことばであるはずにもかかわらず、自分のこだわりでそれを妨げることはなんと無意味なことだらうという思が生まれ、その日から名古屋より東の出身の方、また日本語のネイティブではない方に対しては共通語で話すようになりました。

閑話休題。日本語を専攻していたと言うと、多くの方に何を勉強するのか聞かれます。私は日本語教育系の授業を履修していたこともあり、『日本語を外国の人に教えるための勉強』と答えるようにしています。

また、日本語の音声学や文法も学ぶことを伝え、具体的な例として在学中に先生に教えていただいたクイズを出すこともあります。たとえば「案内、案内、塩梅、実はこの3つ言葉に含まれる『ん』の音はすべて別の音です。では『散歩』は先ほどの3つのうち、どの言葉と同じ『ん』の音でしょう」というものや、「次の二つの文は異なる状況を表しています。1つ目が『私は庭に財布を見つけました。』2つ目は、『私は庭で財布を見つけました。』です。さて、どう違うでしょうか。」というものです。前者は比較的正解率が高く、後者は感覚的に違うと感じても、説明は難しいという場合がほとんどです。

その他、外部の方に驚かれるのが韓国語とアラビア語を学んだということかもしれません。それぞれ1年間も学び続けたにも関わらず、2年生の時のアラビア語には『は一じむむるひーや』『いふたふやーしむしむ』程度しか記憶になく、文字の読み書きもすっかり忘れてしまっています。先生のお話は非常に面白かったのですが、1限目だったのが災いしました。もっと熱心に勉強していたら…と今でもと悔やまれてなりません。

そして東京外大といえば、何と言っても外語祭です。1年生の時の料理店では焼きそばや焼き鳥といったお祭り屋台メニューを並べました。わざわざ外語祭に来て日本の物を食べる人がいるのか、と思っていたのもつかの間、3連休中の開催日はお店の中でてんでこ舞いだった記憶があります。

2年生の語劇では柴田先生に台本を書いていただきました。SFな竹取物語で、台本をよく読む前に「この役がいい！」と言ったら準主役級の役だったことが判明して、あの時はとても焦りました。私たちの代はアルバイト等に忙しい留学生が多く、比較的J1の学生がたくさん語劇に出た代だと思います。とても楽しかったのですが、これもやはりもっと熱心にやっていたらよかったことの一つです。もしかすると学生時代の一番の心残りかもしれません。何事も一生懸命やらないともの足りないということを学びました。

卒業後も毎年必ず外語祭を訪れ、同期はもちろん先輩後輩にもお集まりいただいて楽しい時間を過ごしています。ミールそばの丘の上で盛り上がっている集団がいたら、それはもしかすると私たちかもしれません。いつまでも日本課程のつながりを大切にしていきたいと思っています。

最後になりましたが、日本専攻の益々の発展をお祈り申し上げます。